

JICA 大学生国際協力フィールド・スタディ・プログラム レポート

宮崎大学 村田望

今回の JICA 大学生国際協力フィールド・スタディ・プログラムでは、18 日間にわたり国際協力プロジェクト訪問で様々な異なる立場から活動されている方々に会うことが出来た。

まず、国際機関としては UNDP を訪れ、ラオス政府の計画投資省にも訪問することが出来た。ここではラオスという国全体に関わるような活動を行っている日本人から話を聞き、ラオスの国民性や知名度の低さなど現在の全体としての改善していくべき点について説明を受けた。また、NGO としては、学校図書館の地域への事業を展開している「ラオスの子ども」と、同じく図書系だが図書館運営・建設を事業の核としている「シャンティ国際ボランティア会」を訪れた。ラオス政府に少数民族の言語を推進させていくことは禁止されているため、ラオス語で少数民族の民話を教えるなどといった方法をとっていることを知った。また社会主義国において NGO が活動することに対しては政府の目が少し厳しいというのも特徴であるようだ。日本が支援している南部メコン川沿岸地域参加型灌漑プロジェクトを訪問し、多くのことを考えさせられた。このレポートの後半で詳しく説明する。他には、青年海外協力隊を訪問した。中学校では女性隊員が教師として、ラオス国立大学工学部では男性隊員が IT 学科の教師として派遣されていた。日本人として現地にまざり一人で活躍している姿はとても刺激的だった。現地でラオス人が中心として行っていると思った訪問先には、タッサノ農業センターとコーヒー農園の二つがある。タッサノ農業センターでは 50 代の女性が、農業試験場であるタッサノ農業センターの管理を行っていて、その力強さに感銘を受けた。コーヒー農園ではラオスではあまりみなかった大きな圃場をみさせてもらうことができた。ラオスに進出している数少ない日本企業として、ツムラのグループ会社であるラオツムラとカメラメーカーであるニコンを訪問した。ここでは、企業がラオスに進出した理由やメリット、デメリット、そして進出することでの開発途上国に対する影響を中心に質問した。

このように前半で数多くの組織、団体を訪問し、自分たちの中でもある程度のラオスに対するイメージが作られた後、プログラムの後半で 3 つの村にミニ・フィールドスタディとして訪問した。



2. 現地プログラム参加前後の認識の相違

以上のような経験をした後で、プログラム参加前後の認識の相違について述べたい。

私が今まで関わってきた国際協力活動に関しては、身近で行われて活動が中心であった。例えば、開発途上国に古着をおくるイベントや、大学の留学生の言語学習支援プログラムへ参加し、日本語の勉強の手伝いを行っていた。しかし、今まで実際に開発途上国を訪れ、その国の文化や地方に住む人々と関わり生活に触れることはなかった。

そのため、私はこのプログラムに参加するにあたり、実際に現地へ赴きそこでの情報を肌で感じ、自分の勉強していることへの考えをまとめるきっかけなることを期待した。

私は大学では農学部に所属していて、水資源利用について関心がある。実際の開発途上国の村を訪問し、さらに南部メコン川沿岸地域参加型灌漑農業振興プロジェクトも視察することができた。このプロジェクトは、灌漑用水を農地に安定的に供給するという観点から、メコン川沿岸地域の5つの灌漑モデル地区を対象に2010年から行われているものだ。活動内容は主に3つあり、1つ目は農民が労働力を提供して水路をつくる参加型水路整備、2つ目が灌漑施設や生産組織を管理する農民組織の強化、3つ目が農家に「売れるものをつくる」ための商品作物の導入と生産である。これらを軸にガイドラインを作成し、農業普及員を教育・指導するものである。そこでは政府と国民とのプロジェクトに対する意識のギャップがあるということを知った。政府がこのプロジェクトを日本政府に要請したのは、灌漑に



よって農村での二毛作を可能にさせ、収量を増加させることが目的だった。しかし農民は自給できるだけの収量が取れた場合にはそれ以上の作付はあまり望んでいないとのことであった。私はこの政府と国民との意識のギャップがあるということは認識してはいなかったが、実際にプロジェクトの効果を得る地元の農民と政府での考え方にギャップがあったのでは、その案件は上手く行きようがないではないかと思った。

このことから、後半のミニフィールドスタディで、農民の生産意欲は実際にどうなのだろうかという疑問をもって3つの農村を訪れた。

質問事項には灌漑の有無を用意していたが、どこの村でも灌漑施設はなかった。すなわち彼らは現在雨季の間の天水田で作付を行っているということである。インタビューを行った結果、彼らの稲作についての意識は自給用だけで終わっており、余剰作物が出た場合には市場に売りに行くというものだった。しかし、余剰作物は市場でも高値で取引されるわけではない。しかも農業に割く時間は、他の分野での就業が進めば少なくなる。この中でわざわざ二毛作をしてまで収量を増やすメリットは確かに少ないのではないかと感じた。先に訪問した南部メコン川沿岸地域参加型灌漑農業振興プロジェクトの進行を思うと道のりはとても長いものだと思った。

なお、村への移動途中で乾季にもかかわらず一面に綺麗な緑色の田園風景が広がる地域は数か所存在した。その地域ではなぜ乾季に稲作を行っているのか知る機会がなかったのは残念であった。

プログラム参加前の考えでは、発展途上国の地域の方の意見をまとめ双方の利益を得られるような活動をしたかった。そして国際協力を特別視せず、経済活動に組み込むことで継続してプログラムで学んだことを生かせるのではないかと考えていた。

今後は官民連携プロジェクトをより積極的に増やしていくと良いのではないかと思う。例えば今回訪問したラオスツムラは、創立の目的が、生薬試料量増加への対応や南方生薬のトレーサビリティの確立により、新しい安定供給ルートを得る



ことである。他方、社会貢献活動として、地元の優秀な人材を雇用し、作業者も周辺農民を雇っている。また生産した生薬については親会社のツムラが100%買い上げるため市場に困ることはない。ツムラでは他にも周辺の中学校・橋・道路・井戸・灌漑施設・電気配線などの整備も行っていたが畑の安全性確保のための不発弾除去も行ってた。これはODAとの連携でJMASなどの団体に依頼し、作付予定の畑の不発弾を除去し生薬を栽培、最終的には再びラオスにその土地を返すため双方利益のである内容であった。このラオスツムラの現地で社会貢献にこの県の知事も大変喜んでいそうである。これはODAの官民協力体制が上手く機能している例といえる。

日本のODAは、官民協力という形ではあまり発展していない印象がある。社会貢献度が高い民間企業であれば政府は推進していくべきであり、そのために企業が率先して社会貢献を行うようになれば相乗効果が望めるのではないだろうか。企業側としては利益追求という点も大切ではあるが、利益の出ない部分を政府が支援し、より良い結果を生み出すことが出来るのではないだろうか。

また、発展途上国の地域の方の意見をまとめ双方の利益を得られるような活動をしたという考えについては、国際協力に関する語学への認識が私のなかで変化した。国際協力するにあたり、英語はツールとして世界で多く用いられていることはプログラム前にも知っていた。海外でのコミュニケーション経験が乏しい私には、英語を学習しておけば通訳の方を雇うことでどこでもインタビューなどの調査を行えるだろうと考えていた。しかしこの考えは、ラオスでのミニ・フィールドスタディの調査を経験して大きく変化した。今回のミニ・フィールドスタディでは、英語とラオス語が扱える通訳を通して村で質問した。結果として、私たちが村人に質問した回答を他の人がラオス語で尋ねたところ、異なった回答が返ってきた。村人が通訳を挟んだから答えを変えたというよりも、通訳を介したことで質問内容が変化した結果だと思われた。また、通訳を介した調査は予想より時間がかかる。



今回のフィールド調査では事前研修での学習を生かしHowとWhyから始まる質問はしないよう徹底したが、それでも時間が多くかかった。もし現地の言葉を1つでも多く使えたら、時間の短縮と質問の内容が変わる可能性を減らせただろう。プログラム参加前に持っていた、発展途上国の地域の方の意見をまとめることがいかに

難しいことか思い知らされた。

最後に、このプログラムでの最大の収穫は、国際協力というものの捉え方の変化である。開発途上国へ国際協力を行う、という言葉からは裕福な国が貧しい国へ何かをしてあげるというイメージが強かった。TVなどのメディアなども同情心を煽って協力を呼びかけるようなものが印象に残っているからだ。しかし今回、ASEANの中でもLLDCであるラオスを訪れてそのイメージは変わった。調査で訪れた村では今の生活を楽しそうに過ごしているように見えた。

そのような国を、日本としてどのように協力してどのような成果を見いだすのか、答えは、そう簡単ではないが、今回の現地プログラを通じて考えを深めることができたことは、私にとって大きな成果だと思う。(了)